

作品介绍：亀倉雄策旧蔵アイコン「キリストの復活と十二大祭」について

高 晟 俊（コ・ソンジュン）

新潟県立万代島美術館 主任学芸員

新潟県立近代美術館・万代島美術館では、ロシア・アイコンの作品を3点所蔵している。そのいずれも新潟県吉田町（現・燕市）出身のデザイナー亀倉雄策旧蔵のもので、氏の没後に遺族から新潟県に寄贈され、美術館の所蔵となっている。そのうち「カザンの聖母」および「聖ソフィア」は図録として公刊されているが、「キリストの復活と十二大祭」ははまだ館外には紹介されていないため、本発表では画像と共に概要を紹介し、今後の研究課題と共にまとめておきたい。

銀座・月光荘扱いという来歴を持つ「キリストの復活と十二大祭」は、1970年代に当時のソ連政府が積極的に輸出した18-19世紀アイコンの一つである。また、「キリストの復活」を中心に十二大祭に相当する12場面を配した形式のアイコンは、18-20世紀のロシアではかなりの数が制作されたらしく、現在でも無数の作例が市場に流通しており、日本国内でも、西田美術館（富山県上市町）、金沢美術工芸大学美術工芸研究所、玉川大学教育博物館のコレクションがある。

この形式のアイコンにおいては、十二大祭図像に囲まれた復活大祭図像として「冥府降下」と共に「墓から立ち上がるキリスト」が共に描かれるのが常であるが、そもそもビザンティン美術においては「キリストの復活」の図像伝統としては「冥府降下」が一般的であり、「墓から立ち上がるキリスト」がビザンティン世界において描かれるようになるのは、16世紀末～17世紀のことと推定されている。その契機が、しばしば指摘されているように「ピスカトールの聖書」(Theatrum biblicum, 初版1639年、アムステルダム刊)をはじめとする西欧の挿絵入り聖書本の影響によるものかどうかの検証は必要であるが、実際ヤロスラヴリ美術館では、1640年代後半から1650年代前半と推定されている、二段構成の「キリストの復活」のアイコンを所蔵している。

また、ビザンティン時代の十二大祭はキリスト伝からの12場面を指すのが通常であるが、亀倉旧蔵アイコンをはじめとする19世紀のロシア・アイコンにおいては、今日の正教会で定められている十二大祭に厳格に対応している作例がほとんどである。過渡期の17世紀の作例であるストロガノフ派アイコン「ウラジーミルの聖母と聖大祭」(エルミターージュ美術館蔵)には20場面が描かれており、必ずしも12場面に限られてはいない。18世紀の作と推定されるアイコンには、亀倉旧蔵アイコンと同様「聖母マリアの誕生」にはじまる十二大祭場面と「キリストの復活」を組み合わせたものが登場してくるが、これまで数多くあった場面を12という数に限定したのには、改めて正教会の内部で「十二大祭」の定義が厳格化したことが背景にあるだろう。それが正確にいつ頃のことであり、またそれがどのようにアイコン制作に影響が加わってくるかを検討するのも、今後の課題である。